

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006-2010

課題番号：18520029

研究課題名（和文） 現代意味論・語用論の観点からみた中世存在論の再解釈

研究課題名（英文） Reconsidering medieval ontology from semantic and pragmatic points of view

研究代表者

加藤雅人（KATO MASATO）

関西大学・総合情報学部・教授

研究者番号：90185869

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：意味論、語用論、存在論、中世哲学、分析トミズム

### 1. 研究計画の概要

本研究の目的は、西洋中世哲学と現代哲学との対話を促進し、現代哲学の視点から中世哲学の新たな解釈を試みると同時に、逆に現代哲学の課題に対して中世哲学のアイデアを提示することによって、その解決に向けた現代の議論に貢献することである。中世における存在論、とくにトマス・アクィナスやガンのヘンリクスの《esse》の理論には、この世界における人間の有限な言語と永遠性（神）との何らかの意味表示関係という、現代には知られていない重要な意味論が含まれている。これらの理論を現代の意味論や語用論の観点から、とくに「存在は述語ではない」に代表される現代分析哲学の「存在」解釈という問題との関連の中で検討することによって、中世哲学における意味論と語用論の諸相を現代の分析哲学に理解可能な文体で提示することを意図する。

### 2. 研究の進捗状況

本研究の進捗状況は以下の通りである。

- ① 中世存在論関係の一次文献、および二次文献の収集については、国内では関西大学、京都大学、上智大学中世思想研究所などの図書室所在の文献や電子ジャーナル、および英国ケンブリッジ大学図書館、レーヴェン・カトリック大学哲学高等研究所図書室などを利用してほぼ終え、現在、収集文献の読解を進めている。
- ② 中世存在論を現代分析哲学系の意味論から解釈した文献の収集と読解についても、上記と同様である。

③ 分析哲学系の意味論に関しては、論理の意味論について概観をほぼ終え、現在は認知意味論、とくにカテゴリー化とプロトタイプ意味論に関して、文献と実験によって調査した結果を論文にまとめている。

④ 上記①～③で読解したテキストの文献情報と内容データベース作成を順次行なっている。

⑤国内外の学会や研究会に参加し、情報交換と研究討議を適宜行っている。

### 3. 現在までの達成度

<評価>概ね順調に進展している

<理由>上記進捗状況にあるとおり、①～⑤で計画をほぼ達成している。ただし、中世の存在論を現代の意味論・語用論の観点から説明するという大目的達成が必ずしも容易でないことが判明しつつある。

### 4. 今後の研究の推進方策

最終年度で、これまでの実績を踏まえて、中世哲学における存在論を現代の意味論の観点から再解釈する。

### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 加藤雅人、存在は述語か？：W.Kneale と G.E.Moore の論争(1936)、関西大学哲学、査読無、第 27 号、2009、pp.1-19

- ② 加藤雅人、文の意味と情報、日本語学、  
査読無、vol.25, no.5、2006、pp.6-14

〔図書〕(計 3 件)

- ① 加藤雅人、関西大学出版部、記号論理の  
基礎、2008、84p
- ② 加藤雅人ほか、中央公論新社、神との対  
話－哲学の歴史 3、2008、774p  
(pp. 585-604)
- ③ 加藤雅人ほか、知泉書館、中世と近世の  
あいだ－14 世紀におけるスコラ学と神  
秘思想、2007、554p (pp. 225-246)